

第5部会

ユダヤ教におけるギリシア文化の衝撃

市川 裕

一つの宗教文化の形成において、異文化との接触が重要な役割を果たすことがある。日本文化における中国文化の影響は言うまでもなく、近代日本文化の成立に、西洋文化の果たした役割は特筆大書されるべきものである。本稿は、ユダヤ教の歴史を振り返って、ユダヤ教独自の文化形成に果たしたギリシア思想の意味を考察する。いかなる衝撃を与え、いかなる応答が成されたか。そこから、両文化、特にユダヤ教の特徴を浮き彫りにしたい。

史上、ユダヤ教はギリシア思想と二度遭遇した。古代、中世、近現代である。現代の状況は、レヴィナスの自己規定の仕方に明快な立場が表明されている。パレスチナ以外の土地に住んで、ユダヤ的でもありギリシア的でもあることを希望するユダヤ人は、どこにいても生きていくのを可能にするアイデアが求められる。そこから彼は、土地取得という力への意志ではなく、タルムードの知恵を現代的に定式化することの必要性を、身をもって体現した。そこで想定されるユダヤ的なものは、タルムード的な学問であった。

ではなぜ、タルムードなのだろうか。そこで古代のギリシアとの遭遇を振り返るとき、タルムードの賢者たちは、ギリシア思想の魅力とともにその脅威を自覚していたことが確認され

る。かれらは、ユダヤ人の学問の領域に制限を設け、またギリシア語という言語の学習を子供に禁じたのである。事実、ラビ・ユダヤ教において、ギリシア語の著作は継承されなかった。ギリシア語訳聖書、旧約聖書外典、黙示文学、神秘主義的教説しかりである。しかも、ギリシア語による著作では個人名の論文が一般的で、個人の思想を表明する文化とすれば、ユダヤ的学問は、神の言葉そのものを表出する文化を作り出した。タルムードにしろ、ミドラシュにしろ、編纂された著作はすべて神の言葉と教えを中心に据える。

言語の自覚的な廃棄と、ある種の学問領域の自覚的な廃棄とは密接に結びついていたと思われる。トーラーの啓示に対する絶対的な信頼を破ってはならないという大前提から、四つの学問領域が忌避された。四つとは、「上、下、前、後ろ」に対する探究である。上とは形而上の世界、あるいは天の玉座の観想であり、下とは死後の生命や靈魂の行方についての思索である。前とは、天地創造の始まりであり、後ろとは、世の終わりをめぐる思索である。これら四つの事柄に思いを致す者は、この世に生まれてこない方がよかったとさえいわれた（ミシュナ・ハギガー2・1）。これら四つは、ヘレニズム時代のイスラエルで、神殿祭司層を中心に黙示文学の主要テーマだった。人間の魂が天に上昇し、各天球を通過して神の玉座メルカヴァーに至るという天界飛行。世界の始まりは、言葉による天地創造の業マアセ・ベレシートを究明する学問へと発展したが、万物の原因と原初を究明する「アルケーの学」は、ギリシア哲学の本領である。世の終わりは、「エスカトスの学」として黙示

文学の格好の題材。靈魂の不死に至つては、プラトン主義やピタゴラス派の主題である。

ユダヤ教はこれら四つの事柄が、経験的に知り得ない領域の知識であつて、生半可な知識は軽率に神の權威を疑い、トーラーの根柢を揺るがしかねないとして忌避したのである。ユダヤ教が定める人間の歩むべき義なる道ハラハーとは、経験世界における日々の営みにおいて、何が正しく何が邪な行いであり、何が許され何が禁じられ、何が清く何が穢れているかを識別し実践する学であり、これこそがこの世において神の栄光の宣揚を意味した。

ギリシアの学問は中世においてイスラーム哲学を通してアラビア語に翻訳されて圧倒的魅力をもつて立ち現れた。しかし、アラビア語で為されたユダヤ哲学は一二世紀のマイモニデスを頂点に衰退する。彼は、ユダヤ法についてはヘブライ語で著作しており、ユダヤ教的思惟は、ヘブライ語によってこそ浸透することを自覺していたかのごとくである。

聖人の誕生

——コプト・キリスト教を事例として——

岩崎 真紀

カルケドン公会議において異端宣告されローマ教会と袂を分かつて以来、エジプトで独自の発展を遂げたキリスト教、コプ

ト・キリスト教（コプト正教会）の信仰世界を理解しようとするとき、その特徴的な要素のひとつに聖人崇敬がある。コプト・キリスト教における聖人とは、信仰者の理想であるとともに、神と人間のあいだのとりなし（シャファアー）を行う存在である。コプトの公的な教義においては、ある人物が聖人と認定されるためには、死後五〇年という期間と、厳格な列聖制度に則った審査が必要とされる。しかし、現実には特殊な宗教的能力を持った人物は、存命中でも、死後五〇年未満でも、聖人とみなされ、人々の崇敬を集める。

本発表では、エジプト中部の都市ミニヤ市近郊の村で現在司祭を務めているアブーナー・インジールウスという修道士の半生と信仰実践、そして、彼に対する人々の崇敬を見ていくことで、コプト・キリスト教における聖人崇敬がいかにして成り立っているかを考察した。

アブーナー・インジールウスは、一九三二年一月二五日、ミニヤの南約二〇〇キロに位置するソハージュ県ジュハイナ市で、裕福な大工の両親のもとに誕生した。家族の知人に修道士があり、彼は修道生活に興味を抱くようになる。一六歳を迎えると同時に故郷を出て、修道士となるべく紅海に面した東方砂漠にある世界最古の修道院聖アントニウス修道院に入った。同院で修道生活を送る一方、前総主教キュリロス六世の指名により、六八年から七五年にはエルサレムのコプト教会の司祭を務めた。帰国後ベニ・スエーフ県（ミニヤ県の北隣）の修道院に入るが、七六年、「聖ジョージの導きによって」現在司祭を務めるサフト・シャルキーヤ村の聖ジョージ教会の司祭となり、